おおふな

２０２６年１０月１９日 No.12

発行者：森田隼士　編　集：情宣部

ＪＲ東労組
大船支部

「第３５回情報コンクール」最優秀機関研修
～東日本大震災から安全を学ぶ①～



１０月６日～７日にかけて「第３５回情報コンクール」最優秀機関研修が開催されました。今回の研修では６日に「健太いのちの教室」代表理事の田村孝行さまからご講演を頂き、７日は女川町の現地踏査を行いました。

２０１１年3月１１日、宮城県女川町の銀行に勤めていた田村さまのご子息は、勤務中に被災し銀行からすぐ近くの高台へ逃げることを考えていましたが、会社の指示は高台へ逃げろではなく、店内鎖錠と屋上への避難でした。地震発生から約３０分後に津波は銀行屋上に到達し、ご子息を含め多くの方が犠牲になり、１５年が経過した今もなお行方が分かっていない方もいます。震災から学んだ命の大切さ、安全な社会へ向けてどうあるべきか、そうしたことを現在、次世代へ生かし続けるため、「健太いのちの教室」を設立されました。

ご講演では冒頭、田村さまより

「みなさんは組織、会社の中で命を失うことを考えたことがありますか」
「みなさんの会社では安全を守る体制がつくられていますか」

と問いかけられました。この情報をお読みのみなさんはどう感じますか？　今のＪＲ東日本の中ではどうなっているのでしょうか。もし命が脅かされるような状況にあるのなら、または安全を守る体制が充分でないのなら、私たちは何をなすべきなのか。そのことに私たち一人ひとりが向き合っていくことが重要だと感じました。この他にもなぜ屋上に避難したのか真実を知るべく銀行側と話し合いをするも平行線で、そこから裁判でのたたかいを決意された中での思い等も語って頂き、最後には「私と同じような思いをして欲しくない。鉄道は必要なインフラ、みなさんは無くてはならない存在。１人でも多くの組合員を増やして欲しい」と言葉を頂きました。

その後の意見交換では参加者から「自職場でも過去津波警報が出ている中で作業をしていた若手がいた。管理者に指摘したら『別に何も無かったのだから良いのでは』と言われた」「仕事で命を落とす、そんなことあってはならない」「台風で警報が出る中、増水した川の様子を撮影し動画で送るよう指示された組合員がいる。結果何事も無かったので良かったが、川に流され亡くなっていたらと思うとゾッとする。命がいくつあっても足りない」等の意見が出されました。会社は労働者を守らない、健全な会社を取り戻すために、共にたたかう仲間を増やしていくことを一致してきました。



命を最大の価値基軸に、安全で安心して働ける職場をつくり出そう！！